

14

島根県医学校長を務めた佐々木文蔚： 青森県初の医学士の生涯と業績

佐々木俊徳

青葉こころのクリニック（青森市）

佐々木文蔚（ささきぶんい、1852・嘉永5年6月1日-1892・明治25年11月30日）は、青森県初の医学士（1879・明治12年東京大学医学部卒・第一回生20人の1人。ただし、明治9年卒業生を東京医学校卒業生とする）であり、明治12年10月より創設された島根県医学校初代校長として採用され、同時に附属の島根県松江病院長として勤務した。これまで佐々木文蔚の生涯に関する報告は松木（1980）や川村（1988）らによるものがあるが、研究歴を含めたものは見られていない。今回、島根県医学校長後に宮城医学校長と宮城病院長として勤務した時期から関わった海軍軍医時代の研究歴を含めてまとめたので、その内容を報告する。

佐々木文蔚は陸奥の國弘前（現青森県弘前市）紺屋町生まれ（本籍：弘前市相良町）で、父親は弘前藩医・佐々木元亨（長崎の鳴滝塾留学）であった。幼名を元龍といい、弘前藩の学問所稽古館と英学寮で学び貢進生となり、明治3年9月大学東校に入学。文蔚の弘前出立1ヶ月後に父元亨は死去。その後大学東校で厳選された生徒として残り、長与専齋が校長を務めた東京医学校を経て、明治11年11月東京大学医学部を卒業。翌明治12年10月医学士の称号を授けられ、青森県初の医学士となった。前述のように東京大学医学部第一回卒業生20名の1人であり、森鷗外の2年先輩に相当する。

文蔚は島根県医学校（乙種：医学士一名）に招聘され校長として採用された。明治12年7月島根県松江公立病院を引き継いだ県立松江病院長に就任。文蔚就任時に県立となり松江医院に改称。10月に開設された島根県医学校長にも就任し、医学校では実地修行を重視し、日本語でドイツ医学の授業を行った。一方で明治13年1月に竣工した洋館建物で一般外来患者の診療も行い、明治13年5月島根県初の病理解剖を執刀。経済的に困窮する住民を対象とした施療制度も設けたという。県内巡回し、象皮病を報告。明治16年12月両職を依願退職した。

明治17年2月宮城医学校長と附属宮城病院長に就任。明治18年3月第一回仙台医術開業免許試験委員。明治19年8月両職を依願退職した。

松田（1997）は、佐々木文蔚が明治18年9月より明治19年9月までの期間、宮城医学校長時代から高木兼寛（1888）の指導の下、犬脚気の研究に他の海軍軍医ら5名と共に従事していたことを報告した。文蔚が担当した犬の発育は脚気食群犬が中等であり、健康食群犬がやや優良であった。いずれも脚気症状はなく、生存した。その後文蔚は明治19年9月海軍大軍医に就任し、東京医術開業試験委員を務め、成医会講習所では解剖学、内科学の講義を行った。

文蔚が関わった出版には、島根県医学校長時代の「人体解剖学。第2巻、佐々木文蔚校閲、石井重義編訳 島根県公立松江医院、明治15年」と、宮城医学校長時代の「病名便覧 黒沢惟則編、佐々木文蔚校閲、明治17年」がある。

文蔚は明治22年軍艦「金剛」軍医長に補され、横須賀鎮守府勤務となり、同年8月にハワイ、グアムなどへの航海に就き、当時ハワイでハンセン病（癩病）が多いことを報告。その後、海軍医学校教授兼監事となり、明治24年1月には軍艦「千鳥」軍医長に補され、新造軍艦千鳥を受け取る任務のため2月に仏国に向け出国。インド洋、スエズ運河経由の上、英国（ロンドン）を経て4月に仏国に到着した。約1年仏国に滞在した後、明治25年4月中旬にサン・ナゼール港を出港し、同艦と共に帰国の途に就いた。11月下旬、無事日本（長崎）に到着したが、佐世保港を経て神戸港へ向かう途中の明治25年11月30日未明、瀬戸内海の釣島海峡で英国商船ラベンナ号との衝突により同艦は沈没し、殉死した。

島根県松江市床几山には、恩師長与専齋撰文による佐々木文蔚を顕彰する碑があり、郷里青森県弘前市の禅林街宝泉院には、文蔚の墓がある。